

YouthがみたCOP23

~Futher, Faster, Together~

UNFCCC COP23 ボン
(国連気候変動枠組条約 第23回締約国会議)
活動報告書



Climate Youth Japan

webサイト:<http://climateyouthjapan.org/>
facebook:<https://www.facebook.com/climateyouthjapan/>
Twitter:@ClimateYouthJp
連絡先:climateyouthjapan@gmail.com

この冊子は平成29年度地球環境基金の助成を受けて作成しています。

デザイン:奥井 希

発行:Climate Youth Japan





CYJ の紹介

CYJ について

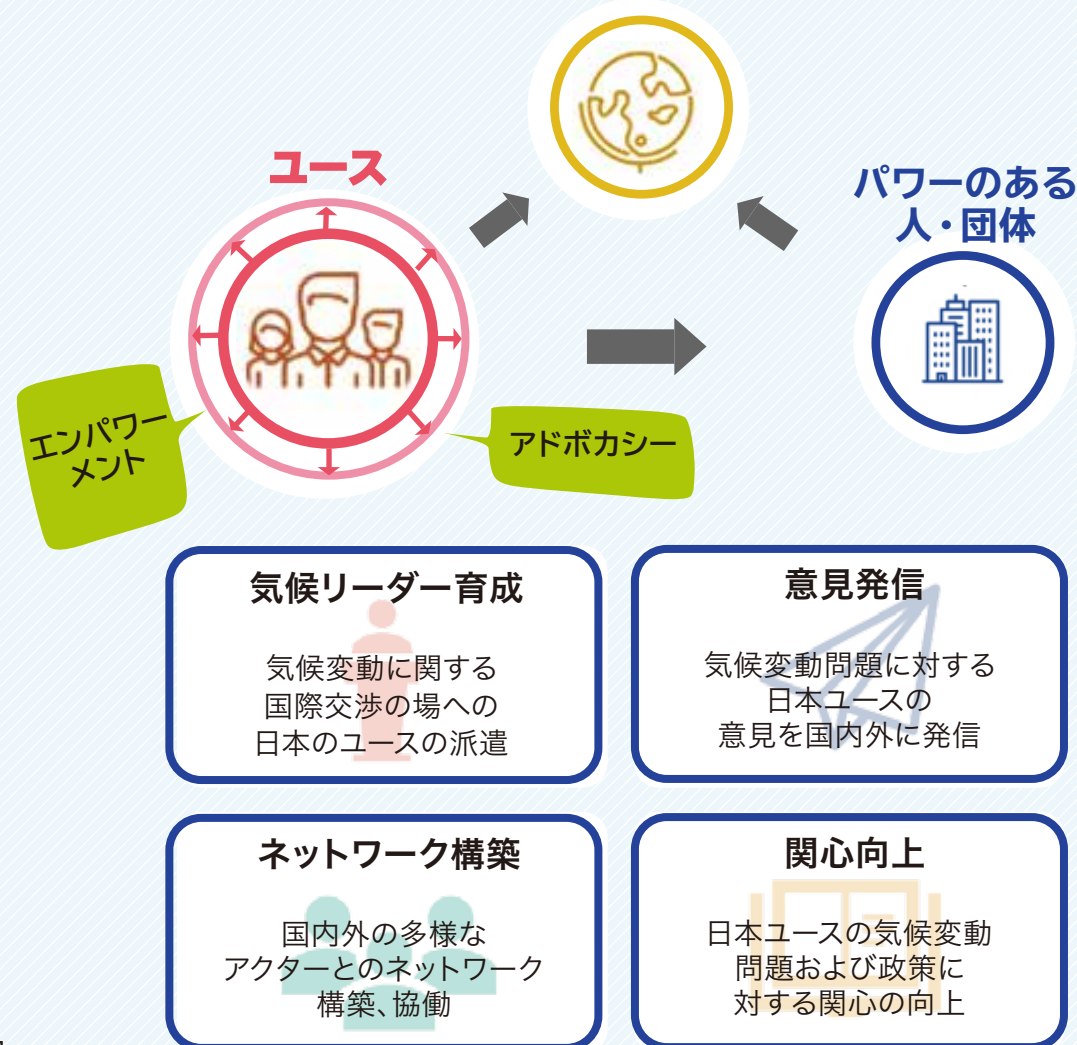
Climate Youth Japan(CYJ)は2010年春、気候変動問題に高い関心を持って活動しているユースによって設立されたネットワーク型NGOです。

CYJのキーワードは、「気候変動」「政策」「ユースの意見発信」です。社会の中で若者が声を上げることにより、気候変動問題の解決を通じた衡平で持続可能な社会の実現を目指します。全国各地でのワークショップ、キャンペーン活動、海外ユースとの交流・活動などを企画しています。

「ユースが気候変動問題を解決へ導くことで、衡平で持続可能な社会を実現する」をビジョンとして、日本政府省庁への政策提言や、COPのような国際交渉の場にユースを派遣、またより持続可能な東京オリンピック、サステナリンピックを推進していくなどの活動をしています。これらを通して、最終的にはパリ協定の2°C/1.5°C目標の達成、ユースが社会の意思決定のプロセスにかかわることを目指しています。



未来の社会



COP 派遣事業について

この事業ではCOPへ日本の若者を派遣し、将来世代を代表したメッセージの発信や気候変動問題に関心を持つ世界のユースとの協働・交流、国内外への意見発信等を経て将来にわたり気候変動問題に取り組む人材を育成するために実施されています。

派遣者は気候変動国際交渉に関する勉強や現地で行うアクションの打合せなど様々な準備を行いCOPへと臨みます。

また交渉に参加する多様な人々や気候変動に高い関心を持つ世界のユースと意見交換をしたり、自分たち自身がイベントやweb等を通じて積極的に発信を行ったりすることで気候リーダーとして活躍できる力を身につけていきます。この事業を通じてより多くの人々が気候変動に関心を持つのみならず、その解決を導くことを目指します。

■派遣期間

2017年11月6日～11月17日

■開催地

ドイツ ボン

■派遣先

国連気候変動枠組条約
第23回締約国会議 (COP23)



2010年のCOP16以来、計25名以上の日本ユースを派遣しており、7回目となるCOP23へは8名が派遣されました*。

※COP21はフランス同時多発テロ事件の影響で中止

COP23 派遣メンバー紹介



高橋 美佐紀
公立鳥取環境大学環境学部4年。専門は森林管理・森林政策。



佐藤 媛香
信州大学理学部4年。物質循環学科で湖のメタン放出について研究。興味は自治体のエネルギー政策。



塚本 悠平
関西大学文学部4年環境倫理学専攻。音楽と笑いをこよなく愛している。



清間 笑奈
京都大学経済学部3年。専門は環境経済学で、現在はドイツに留学し、環境政策を学ぶ。



黒田 琴絵
東京大学教養学部卒業。専攻は環境学とラテンアメリカ研究で、国連環境計画NOWPAP富山事務所でインターン中。



松本 健太
創価大学国際教養学部3年。専門は国際政治学で、移民・難民に関心あり。グレートバリアリーフの白化を止めることが野望。



杉浦 由佳
東京大学農学部4年。生態学を専攻。将来は動物保護に携わりたいと考えている。



今井 絵里菜
神戸大学経済学部3年。環境経済学を専門に学び、現在はドイツ・キール大学に留学中。

COY13 COP23 とは



『COP』とは、Conference of the Partiesの略であり、締約国会議という意味です。条約ごとに存在しますが、ここでは、毎年開催されている気候変動枠組条約 (United Nations Framework Convention on Climate Change: UNFCCC) を指します。

現代社会の産業発展に伴って、多くのCO₂が排出され、それらが大气中の熱を吸収することで地球の気温が継続的に上昇するようになりました。この地球温暖化問題を主として包括し、気候変動問題と規定して、その悪影響を防止するための取り組みについて国際交渉がなされている場が『COP』なのです。

初の島嶼国として、フィジーが議長国を務め、海面上昇に苦しむ島嶼国の声やその気候変動に対する脆弱性をフィジーがどのように代弁していくのか、注目が集まりました。これにより、気候変動の緩和や適応だけでなく、損失と被害に関しても焦点があてられることとなったのですが、残念ながらこれの結論は先送りしました。

次に大きな争点となったのが、2015年に採択し、二年経ったパリ協定の細かなルール策定に関してです。国際社会で各国の裁量に委ねられる目標達成具合の評価に関して、途上国や先進国といったお互いの立場をどう越えていくか、パリ協定が合意されたものの、依然課題となっています。

国家だけでなく、企業や自治体、地域社会といった非国家主体による活動も注目されました。事実、米国のトランプ氏がパリ協定離脱の意向を表明して世界を騒がせましたが、その決断に反対する自治体、企業、大学などが「we are still in」＝「私たちはまだ参加している」という団体となって二酸化炭素削減の動きが活発化させています。



COY とは

『COY』とは、Conference of Youthの略で、世界中のYouthが気候変動をテーマに集う国際イベントです。その企画運営はCOP開催国のYouth団体によって行われ、気候変動に関する様々なワークショップや専門家による講義、展示企画などがあります。CYJも今年度はワークショップに携わっていました。



(1) パリ協定の実施指針に関する議論の推進

先進国と発展途上国の間にその取り組みに際を設けるべきではないと進言し、「NDC」「透明性枠組」「市場メカニズム」を含む議題において技術的な内容の提案。



日本政府の目的

(3) グローバルな気候行動の推進

日本政府としては Japan Pavilion というイベントスペースを設置し、国・各種機関・組織・研究者の取り組みの紹介や議論を行うイベント多数開催し、紹介。

(2) タラノア対話のデザインの完成

NDC の提出・更新に向けた総会として議長国をサポートし、そのデザインの完成に貢献。

※タラノア対話とは「意思決定の透明さを意味するフィジー語」で、COP23 で決定された各国に温室効果ガス削減目標の上積みを促す対話プロセスのこと。

日本は、これらの三点についておおむね達成できたとの評価をする立場をとっています。しかしながら日本には二酸化炭素排出量が多い石炭火力発電を推進する現状があり、再生エネルギーへと転換する必要があります。



(写真) 環境省より

日本が「本日の化石賞」受賞？



COY13 COP23 で の活動



サステナリンピックをはじめとした日本ユースのアクション ～若者の参画を問う～

どんなことをしたか

【第1部】オリンピックと環境問題の関係性についての講義、およびサステナリンピックムーブメント*の経緯と活動紹介

【第2部】サステナリンピックムーブメントに向けてユースと他世代をどのように巻き込めばよいかテーマでディスカッション

*より多くの若者が持続可能な未来に向けてアクションを起こすユースレガシーを残すことを目指すもの

▶第2部の様子。
参加者同士の経験をシェアしながら話し合い、気候変動のイメージを楽しいものにする、テクノロジーをうまく活用するなどの意見が出ました。



何が得られたか

年齢・仕事・国籍が多様な22名の参加者にサステナリンピックを知ってもらい賛同を得ました。また世代をまたいだ気候アクションを増やすための提案がまとまり、気候変動を解決するという同じ目標を持った人が楽しい時間を共に過ごしたことで、クライメイトアクションへのエネルギーが増えました。

企画を終えて

渡航前に想像していた以上に難しかったですが、現地でCYJメンバーが徹夜をしながら一緒に企画づくりをしてくれました。お陰で当日は熱気あふれる楽しいワークショップになり、幸せでした。今後もユースパワーで突き抜けて行きたいです。(黒田)



最後はピコ太郎の「PPAP」のサステナリンピックver.を歌って踊りました！



NHK でも「COP23」が特集されました！

2017年12月17日放送 激変する世界ビジネス “脱炭素革命”の衝撃

気候変動により変わりつつあるのは国際会議の現場だけではなく、今、環境ビジネスが世界中で急成長しています。

日本は、この新しいエネルギー革命の潮流に乗ることができています。残念ながら、現時点では世界からそう認識されていないようです。

気候変動対策はもはや「善意」に基づくものではなく、真つ当な企業であれば当然の責任として果たすべきものになりました。そして何より、大きなビジネスチャンスとなり、利益をもたらすものなのです。

日本には高い技術力があります。しかし、この新たな脱炭素への流れに乗ることができなければ、新しい時代では生き残っていけないでしょう。この危機感をより多くの人に感じてほしいと思います。



▲China Merchants New Energy Groupのパンダ太陽光パネル。数年前まで気候変動対策に後ろ向きだった中国でも、国を挙げた再生可能エネルギーの導入が急速に進んでいます。

KOREA Pavilion Asian Youth Dialogue on the New Climate Regime and Youth Perspective

どんなことをしたか

韓国の青年環境団体・GEYKの主催でパリ協定以後の気候変動政策と若者の視点についてのイベントが開催され、韓国・中国・台湾・日本の若者が韓国パビリオンに集いました。

企画を終えて

どの団体も発表のレベルが高く驚きましたが、各国での活動を知ることができとても実りのあるイベントでした。特に、台湾のTWYCCのメンバーは気候変動の周知のためのパンフレットなどを作成していて、非常に参考になりました。約束草案に関してはどの国にも改善の余地があるため、アジアの若者として団結して声をあげていくことの重要性を改めて実感しました。(松本)



どんなことをしたか

建物や、森林などの土地利用における温室効果ガス削減の成功事例を発表するというテーマのもと、日本、ドイツ、イタリア、インドネシア、アメリカのカントリーマネージャーがそれぞれ発表しました。



▲村の主要産業である林業の再生を木質バイオマスによる温泉施設への熱供給を導入することにより実現しました。

日本としては岡山県西栗倉村を地域活性と二酸化炭素の削減を同時に達成した優れた事例として発表しました。

日本の若者として

私たちCYJは日本の若者を代表して登壇し、まず日本政府の「2030年までに温室効果ガス26%削減」という約束草案について、エネルギーミックスや省エネに関する政府の具体的な見通しを交えながら発表しました。また、それらに対する国内外の批判的な意見や日本の青年の率直な意見も紹介しました。

発表後のパネルディスカッションでは、現状の約束草案で未来はどうなると思うか、若者の声を一般に広く届けるにはどういった方法が効果的か、の二点について話し合いました。



Climate Scorecard とは、パリ協定以後に発足した NDC の確実な履行を監視する国際 NGO です。温室効果ガスの主要排出国 25 か国にカントリーマネージャーを設け、マネージャーが毎月与えられる質問に回答することでそれぞれの国の動きを報告します。CYJ は日本のカントリーマネージャーを務めています。



企画を終えて

今回は世界の人々の前で発表をするというとても貴重な経験をさせていただきました。プレゼン終了後には聴衆の方から、他の日本の地域の事例についても知りたい、プレゼンのスライドを送ってほしい、と言ってもらえることができ、気候変動対策に携わる人の一助となることができたようでとても嬉しかったです。(清間)

COY13 COP23 で の活動



AYCNとはCOP15に結成されたアジアユースのプラットフォームのことです。メンバーには、日本、台湾、韓国、マレーシアなど16カ国以上が加盟しており、COYサイドイベントの共催やメンバーのスキルアップトレーニング、共同声明文の作成等を通し、COPやアジアの環境活動における『アジアユースのプレゼンスの向上』を目指して連携しています。



どんなことをしたか

初夏の頃より、台湾、韓国、マレーシアユースとミーティングを重ね、COY13ではワールドカフェ形式で、それぞれの国が選んだトピックについて話し合うワークショップを行いました。

日本は「国際会議におけるユース参画の意義について」、他の国は「ユースがより効果的に一般の方を気候変動のアクションへ巻き込むには」、「各国の電源構成についての共有とユースの役割」などがトピックでした。



企画を終えて

AYCNのメンバーとはCOYはもちろん、COP期間も交流する機会がたくさんあり、改めてアジアユースの連帯感の強さを感じました。今後はCOYでのイベント共催だけでなく、アクションの連携も行い、アジアユースとしてそれぞれの活動のインパクトを強めあえるよう協働していきたいです。(高橋)

COP23 でアメリカが大注目！？



COP23開催期間中、国際社会から最も注目を集めた国と言えば…世界第2位のCO2排出国である「アメリカ」でしょう。

この国は今回2つの側面から大きな注目を集めていました。1つ目は外交面。2017年6月、トランプ大統領によるパリ協定離脱の表明があり、今回のCOPでどのような行動をとるかが注目されていました。

アメリカは2020年の11月4日まではパリ協定の参加国です。締約国は3年間は脱退できず、しかも脱退の意思を正式に通告してから1年後に脱退と定められているため、アメリカが脱退ができるのは最短でも

2020年11月4日以降となるのです。ちなみにこの日は次期大統領選挙投票日の翌日であるため、次の大統領次第でパリ協定を離脱しないということも考えられます。COP23においてはアメリカ大使団も、締約国として今まで通り議論に加わっていたようです。

2つ目は、COP23の説明でもご紹介した「WeAreStillIn」です。アメリカの地方自治体や企業は、気候変動に立ち向かう姿勢と取り組みをアピールしました。この団体のパビリオンには世界各国から多くのリーダーが集まり賛同の意を示したようです。

Youth Deligate Programme

本プログラム、Youth Deligate Programmeはユースが国連会議における政策決定プロセスに参画することを目的として創設されたものです。

なぜインタビューを行ったのか

日本は現在、本プログラムに参加しておらず、日本のユースは原則として会議場での発言権を与えられていません。Youth Deligate Programmeへの参画に向けた戦略を立てるにあたり、実際に本プログラムに参画しているユースの意見を仰ぐ必要性を感じてマレーシア、フランス、オランダ、ドイツ、デンマークのユースへのインタビューを行いました。



実際のインタビュー内容

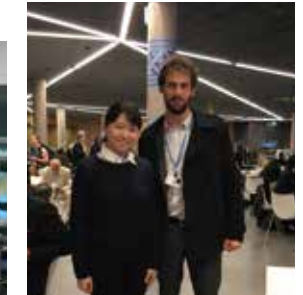
マレーシアユースへのインタビューでは包括的に質問を行うことが出来ました。

・本プログラムへの参画動機

気候変動問題は、マレーシアにとって喫緊の課題であり、且つ将来世代にとって大きな危機であることを彼らは強く自覚しています。また気候変動政策の立案プロセス並びに国際交渉にて若者の意見を組み込むことにより、世代間衡平の観点でよりよい未来を全ての世代が協力的に作り出して行くことを望んでいます。

・参画に向けてのプロセスと結果

まずユースの存在感を上げることを目的に、マレーシアユースの活動並びに気候変動政策についての意見書を作成しメディアにアプローチしました。その後、政府に対して定期的に提言文を送付したり意見交換会を開いたりしました。政府も若者の政治参画に非常に友好的であり、結果的にCOP23の場では毎朝行われる政府団ミーティングへの参加を果たしました。



インタビューを終えて

幾つかのユースにインタビューを行い、得られた成果は大きいです。まず現状として、CYJが本プログラムへの参画においてどのような課題を有しているのか、明確にすることができました。加えて今後本プログラムへの参画に向けて、どの対象にロビイングを行い、またどのようなアプローチで政府や議員に交渉をすべきか等、戦略を立てるに必要な材料を集めることが出来ました。

今後の活動に向けて

今後本プログラムへの参画に向けて、CYJ全体として戦略を立てていくこととなりますが、そのためには外部との協力が引き続き重要となります。海外ユースは勿論のこと、繋がりのある政府団の方に助言を頂き、戦略を固めていくことが求められます。近い将来、Youth Deligate Programmeへの参画を果たし気候変動会議におけるユース参画を実現していきたいです。

派遣 メンバーより



COP23派遣事業統括
高橋 美佐紀

メッセージ

Be the change
that you wish to see in the world
-Mahatma Gandh

(あなたがみたい世の中の変化に、
あなた自身がなりなさい
-マハトマ・ガンジー)

今まで国際会議はとても遠い世界だと思っていましたし、まさか自分が参加できるなんて思ってもみませんでした。

しかし今回参加し、海外ユースをはじめとする様々なアクターたちと交流させていただく中で、私たちユースはむしろ、「私たちの未来を決めるハイレベルポリティックス」へ積極的に関わっていかなければならないのだと強く実感しました。海外ユースは、「ユースがもつ社会を変える力」を信じ、「ユースとしての責任」を全うしています。「こんなことできるのは限られたユースのみ」なんて思わず、一歩踏み出してみませんか。

COP23派遣事業副統括
塚本 悠平



メッセージ

様々な分野で活躍するユースと幾度となく交流してきたことで、私と彼らとの間に発見した共通点があります。

それは知識を獲得することにどこまでも貪欲であり、また熱心にネットワーキングを行い、それらを最大限に活用していることです。興味を持ったことをとことん調べあげ、その道の専門家に近場であれ遠方であれとにかく話を聞きに行く姿勢が、自分自身の成長に大きく繋がることを確信しています。

それは簡単なことではなく、ある程度の時間と気力を要する作業であることは間違いありません。しかし、それを怠れば、目指す道のりを進んでいくことは出来ないでしょう。

参加の目的

「森林を軸に、環境問題の解決に貢献すること」が私の夢であり、これから現場で活動していく前に国際政策が定められる場、いわゆるハイレベルポリティックスを知る。活動を活発にしている海外のユースから刺激を受ける。専門家とつながる。

参加の目的

昨年参加したCOP22での経験を活かし、CYJの派遣事業をより良いものにすると同時に、私個人の研究に大いに活かすためです。派遣経験者の有無が派遣活動の質を大きく作用するので、私は他のメンバーのサポートという仕事を一つ担っていました。

何かに興味を持ったならば、
とにかく行動を起こすことの大切さを

CYJ代表
黒田 琴絵

参加の目的

ユースがなんのためにCOPに行くべきなのか、そしてユースは気候変動のために何をすべきなのかを探るサステナリンピック事業を世界に発信する国際交渉において技術移転がどのように議論されているのを見る



メッセージ

これまでに私はユースの力に限界を感じたり、経験値の少ないユースが堂々と活動してもいいのかなと戸惑ったりすることがありました。しかし、他国ユースやNGOの方からの下のオススのやつの学びにより、ユースとして活動をしていく自信と、ユース活動への希望が湧きました。

- ・ユースの力で社会を変えるには、まずユースの力を信じるべき。
- ・力不足を感じるがあっても、ユースにはユースの役割がある。
- ・気候変動においてはアクションを実践することであるユースは将来の気候変動の被害者として堂々と活動をし、声をあげるべき。



▲家は先進国でも発展途上国でもユースはユース
モーリシャス、ギリバス、パプアニューギニアのユースと。

一緒に明るい未来に向けて
変革を起こして行きましょう！

参加の目的

国際会議という現場を体験し、その具体的なイメージを持ちたかった。
気候変動や自然保護といったトピックに関心を持つ、海外の同年代と交流し、刺激を受けたかった。

メッセージ

COP23に参加できて良かったことは、気候変動問題に直面し、ビジネス界を含んだ世界が大きく変わり始めていることを実感できたことです。

気候変動はもう、関心を持った一部の人が関わるものではなく、世界中の全ての人が直接的に関わるべき、あるいは関わらずにはいられない問題になっています。その流れを早くから体感し、未来をより良く変えていくことは若者の重要な役割だと思います。今知識があるかどうか、経験があるかどうかは大きな問題ではないのです。これからどう動くかが大切なのです。



杉浦 由佳

皆さんも、若者ならではの
野望と行動力を持って
一緒にチャレンジし続けましょう！

派遣 メンバーより



佐藤 媛香

参加の目的

国の温室効果ガス削減目標がローカルな取り組みを考慮した、具体的なロードマップを描けていないように感じていたため、各国の目標と、国とローカルな事業者との協力体制について情報収集することを目的としていました。

私達sustainable世代だからこそ地球の未来を変えられることを知り、自分の意見を持てるような経験を同世代にしてほしい

メッセージ

COP23は島嶼国が初めて議長国担う会議でした。気候変動の影響を目に見えて受けている国からのメッセージは重く、迫力を持っていました。日本は島嶼国ほどの気候変動の影響を受けておらず、新たに石炭火力発電所を増設するなど脆弱な国にしわ寄せをしています。世界では気温上昇を抑えるため、低炭素社会はまったなしで加速するからでしょう。それを担っていくのはまさに、現在20代の私たちです。私は気候変動という大きい問題にどのような形でアプローチできるか、ずっと考えていました。COP23に参加して、低炭素社会の実行主体である地方都市の役割が大きいと感じ、地方都市の低炭素化に関わりたく強く思うようになりました。多くの同世代に今の現状を知って自分の意見を持ったり、将来的に何をしたいのか経験してほしいです。

アル・ゴア氏によるスピーチ

アル・ゴア元米副大統領（地球温暖化対策への貢献で2007年にノーベル平和賞を受賞）による開会挨拶がインドネシアパビリオンであり、たった3分ほどのスピーチにも関わらず、会場前には一時間以上前から長蛇の列が。

「インドネシアは気候変動分野においてとても重要な国の一つである。泥炭地の開発（パーム農園への転用）等とても難しい問題を抱えているが、解決へ取り組んでいく中で必ずグリーンな雇用をインドネシアに生み出すはずだ。気候リーダーや政府の方と協力できて嬉しい。またインドネシアへすぐ行くことを楽しみにしている」というシリアスな内容をジョークも織り交ぜながらスピーチされました（さすが!）。



COP23の直前に『不都合な真実2』のPRで来日した際、日本が途上国の石炭火力発電所建設を支援していることに対して強く批判をしていました。インドネシアはその輸出先として主要な国の一つです。

メッセージ

私は今回COPに参加して、日本国内では考えられないほど世界では気候変動の問題が重要視されていること、また、若者・学生でも1つの重要なステークホルダーとして認識され、また、彼らもそれにそぐうレベルの活動をしていることを知りました。

日本にいと、若者は何もできないというような先入観が生まれがちですが、世界ではそれが少数意見であること、若者は理由なしに大事だという共通認識があることに勇気づけられました。

これからの未来をつくるのはまぎれもなく私たち若者です。私たちには知識はあまりないかもしれませんが、それを理由に何もできないと言うのではなく、若者にしかできないことを探して、みんなで一緒に良い未来をつくっていきましょう！

**これからの未来を作るのは
紛れもなく私たち若者です**

清間 笑奈



参加の目的

将来自分が気候変動対策に関わり活動していくために必要なことを得るためです。具体的には

- ✓ 国際交渉の現場を見る
- ✓ 知識を得る
- ✓ ネットワークを作る

松本 健太

メッセージ

COP23に参加するまでは、自分の非力さを嘆き、だからこそ今は徹して学ばなければならないと考えていました。しかし、その考えはすごく狭かったように思います。

同じ年代にも行動を起こしている若者はたくさんいました。博士号を持っていなくても、働いた経験がなくても、私たちにできることはゼロではないのだと気付くことができました。

今はただの一若者であり、一人ひとりの力はちっぽけに見えるかもしれませんが、これまで歴史を動かしてきた変革者たちだって若いころは同じだったはず。何のために学ぶのかという一点を明確にし、その目的に沿うアクションを同時進行で起こしていけたらと思います。共に頑張りましょう！

何のために学ぶのかという一点を明確にして、その目的に沿うアクションを同時進行で起こして行きたい！

参加の目的

- ✓ 環境先進国との呼び声高い開催国・ドイツの取り組みを自身の目で確かめたかった。
- ✓ 世界中から集う活動家たちと繋がって彼らから学びたかった。

派遣 メンバーより

参加の目的

気候変動に関する目標は議論を重ねて決まるが、それでも目標が達成されない、各国の実行段階に浸透していないことが多いのです。そういった限界を知り、国際機関が手の届かないところで私たちユースが担う役割を考えるきっかけにしたいと考えていました。

メッセージ

気候変動問題と聞くと、いずれは被害を受けるとは言えグローバルな問題だというイメージによって、一人ひとりが持つ責任を忘れがちです。日本は、持続可能なエネルギーに切り替えていく世界の潮流に遅れを取っており、気候変動を加速し続ける存在になっています。ただ、今の状況は我々の上の世代の意思決定に基づくものであり、直接的な責任が若者にはないと考えることもできます。

では次の世代をつくっていくのは？私が出会った海外の若者は気候変動をリアルにシリアスに受け止め、国内でもできる行動を取っています。我々にも政策や企業行動を変えられる権利は与えられています。

小旅行 Essen 欧州グリーン都市に選出された訳とは



私たちは休日にエッセンを訪れ、バルデナイ湖を散策しツォルフェライン炭鉱業遺産で歴史を学びました。

いまだ失業率は高く今後新たな分野での成長を期待しますが、何よりもこういったモデル都市がノウハウを伝達し、他の都市の変遷に役立てることが重要だと思いました。

エッセンにはルール地方の主要都市で、ユネスコの世界遺産に登録されたツォルフェライン炭鉱業遺産群があります。

かつては重工業を軸に栄えたが、現在ではクリーンで環境にやさしい都市へと移行することに成功し、2017年に欧州委員会によって毎年1都市のみ選出される「欧州グリーン首都」に選ばれました。



▲屋上から地域一帯を見渡すと、緑豊かなエッセンと向こうに広がる煙を上げたドルトムントをはじめとする工業都市とのコントラストがはっきりとしていたのが印象的です！

まずは自分の責任と権利を見渡してみては？

今井 絵里菜



編集後記

気候変動という言葉はひどく壮大なことに聞こえるでしょう。気持ちはもちろん分かりますし、その通りだと思います。しかし、もしあなたが、あまりに問題が大きく感じてしまって、自分とは関係ないものと目を離してしまっているとしたら、本当にそうなのか今一度思い留まって欲しいのです。私たちが生活している地球が、私たちの生活で大きく変わろうとしている、そこに私たちは関係ないのでしょうか。かつて、セバン鈴木さんが、「どうやったら直せるのか分からないものをこれ以上壊しつづけるのはやめて下さい」と訴えて、反響を呼びました。将来世代である私たち若者が声を上げ続けなければいけない、CYJは、そんな小さな思いから歩み続けています。私たちは、COP24にて、みなさんの思いを背負って精一杯訴えにいくつもりです。だから皆さんも少しだけ立ち止まってこの地球に思いを馳せて欲しいのです。私たちとこの美しい地球を将来にわたって残して行きませんか。



堀 克紀

「気候変動問題」この言葉を聞いて、事の深刻さをリアルに想像できる人が日本にどのくらいいるでしょうか？この冊子に登場する私たち若者は気候変動問題という地球規模の課題に対して真剣に向き合い、COP23という最も注目を集める場でその想いをぶつけてきました。国際社会は少しずつ気候変動問題の解決に向けて前進しています。しかし、眼前にはまだ多くの課題が山積しています。幸運にも私はCOP24にてその課題に少しでも向き合う機会をいただくことができました。日本の若者により気候変動問題に関心を持ってもらえるようにいただいた機会を活かしたいと思います。最後に、今回この冊子を手にとってくださいました皆さんが気候変動問題に関して少しでも関心を深めていただけたなら幸いです。

宮川 健太郎



メッセージを見てもらうと分かるように、COP派遣事業を通して派遣者それぞれが刺激を受け新しい気付きを得て帰ってきました。COPにはこの場で培われたネットワークが将来的に国際交渉の場で生かされる可能性、アクションを通じて世界に意見を訴える可能性を秘めています。一方で、CYJとしてネットワーキングが個人的なものに留まっていたり、日本のユースとして政府や企業に対して明確なスタンスを持っていなかったりして、その可能性を活かせていないと今回のCOP23で感じました。また派遣者が持って帰ってきた視点を組織としても吸収して、国内での活動に活かす事もこれからの課題です。今年COPに参加したからこそ来年度の派遣の可能性を高められると信じて、メンバーと共に計画を立てていきたいと思っています！

今井 絵里菜

